一の宮巡拝

一の宮巡拝会　発行人　関口 行弘

事務局：兵庫県川西市大和東2-13-10 創房関宮(有)内
電話：072-791-5158　FAX：072-791-5159
E-mail：junpai@sekinomiya.com

入江イズムへの旅立ち

一の宮巡拝会代表世話人 関口 行弘

今年の2月11日から伊勢国一宮椿大神社の神事である獅子舞を見ることから3回目の一の宮巡拝を始めた。第1回目の巡拝は平成5年から約6年を費やし平成11年に終了した。が、今回はおよそ1年で完拝したいと願っている。と言うのは、私が関係している真言宗のお寺のご住職が、来年のアメリカシアトルで開催する「シアトル一の宮シンポジウム＆一の宮百景展」に併せて、「日本人のアメリカ移民の人たちの鎮魂供養をアメリカの地で行いたい。ついてはそれまでに全国にある一の宮さまにお参りを済ませておきたい」是非、私に一の宮巡拝の先達を行って欲しいとの理由からである。そこで椿大神社の獅子舞の神事が3年に1度開催されるということを聞き、本年2月から始めることにした。

巡拝会の設立者の入江孝一郎先生と初めて出会ったのは平成8年の椿大神社で開かれた「全国一の宮会臨時総会」で、その時初めて「一の宮百万人巡拝」をお聞きした。あれから約10年が経つ。

2月11日には志摩国一宮伊射波神社も参拝した。夕方の帰り間際に京都から来たという女性5人に出会った。御朱印をいただきに中村宮司宅を訪ねていたら先の5人の女性が遅れて見えた。20歳代という彼女たちが手に手に御朱印をお願いしている姿を見て、日頃テレビでよく見る若い女性たちとは違った爽やかな新鮮さを覚えた。伊射波神社の氏子総代の方から後日お便りを頂いた。「年々数百人規模で県内外からのお参りが増えている」とのこと。

一の宮巡拝の種を蒔かれた入江先生は黄泉からどのように感じておられるだろう。私も微力ではあるがお役に立てれば幸いである。

5月には初の雑誌「一の宮巡拝」が発行、9月には「奈良一の宮シンポジウム＆社叢百景展」、来年9月の「シアトル一の宮シンポジウム＆一の宮百景展」の開催と巡拝会は着実に歩を進めている。

▼『光陰矢の如し』一の宮巡拝会が再生のため事務局を東京から兵庫へ移転して早半年が過ぎた。長年お世話になった移動教室から現代表世話人 関口氏が経営する創房関宮有限会社内に事務局を移すまで色々な難問があった。▼神々様は自然の流れに沿って会の行く末も、故入江孝一郎先生を一番深く理解する者に継承された。神道の本道は『清明正直』で信仰する行場であるがゆえに、こよなく一の宮を愛し崇敬する誠の巡拝者で在らねばならない、そして新しい布陣が示されたのである。▼会報も遅れはしたが発刊の運びと成った。五月には年刊『一の宮巡拝』創刊号の発行、お木曳き行事参加ご奉仕、七月には関東ブロックの総会と橘三喜の墓前拝礼。九月、奈良一宮シンポジウムと社叢百景展が決定し準備を進めている。▼新生、『一の宮巡拝会』は新しい方向性の元に今までにも増して勢力的に活動している。この動きが一の宮神社の神様のご神意に適って少しでも百万人巡拝の実現に近づく事が出来ればと願っている。（塩）

平成十八年度　世話人　代表世話人＝関口行弘、副代表世話人＝塩原輝昭、近畿ブロック＝中瀬光雄、中国・四国ブロック＝木下雅晴、関東ブロック＝櫻井正憲、中部ブロック＝大谷武司、北海道・東北ブロック＝ダスティン・キッド

一の宮巡拝会 事務局 創房関宮(有)内
〒六六六―〇一二一　兵庫県川西市大和東二―十三―十　電話〇七二―七九一―五一五八　FAX〇七二―七九一―五一五九

●入会金及び会費について
一般維持会員　年会費　三〇〇〇円
賛助会員 一口 三〇〇〇円（何口でも可）
寄付金　お志し

●会費等お振込み先
郵便振替（大阪）00990―5―81515

故 入江孝一郎先生 一周忌

3月5日(日)暖かで晴天に恵まれた東京都葛飾区白鳥にある天台宗三圓山延命寺に有志一同が参集し、故入江孝一郎先生の一周忌法要がしめやかに執り行われました。会報に連載中の『橘三喜』の著者郡順史先生をはじめ、入江先生と御縁のある方々がそれぞれの思いを胸に焼香をされました。
昨年会葬以来の方もおられ、元気でにこやかなお顔を拝顔し再会を大変うれしく思いました。
今更ながら、先生の蒔かれた種の大きさと一の宮巡拝運動の尊さを感じております。
この度の法要に際し、準備をして頂いたご子息の入江光様のご好意に深く感謝申し上げます。

13:30分京成電鉄の青砥駅に集合し、延命寺に到着後まもなく僧侶の読経とともに焼香が始まり、お位牌を拝し入江先生を偲ぶ感慨深い一日となりました。僧侶は、阪神淡路震災後、寂しさのあまり亡くなられた方の経験を例にとり「供養になるので思い出して上げて下さい、向こうで悟りを開く修行をされているのですが、孤独を好む人はいません、良い意味で事あるごとに思い出してほしい。」と法話を頂きました。

次に墓前に進み、皆でお水と線香を手向け、先生への追善供養をいたしました。
堂内では、郡先生が静かに語りかけるようにお位牌をみつめておられたのが印象的でした。入江先生に頂いた貴重な時間を活用し、今年に入ってからの活動報告を関口代表から説明をうけ、5月発行予定の雑誌『一の宮巡拝』創刊号の進捗状態にカラー刷り希望の意見も寄せられましたが予算の関係上、次号に持ち越されました。創刊号の表紙は草木染の古代色四色で 縁取りとし、中央には雲に抱かれた真紅の日の丸が選ばれ、創刊号を飾るうえで満足のいくデザインに全員賛同いたしました。

続いて、9月17日に開催されます『奈良一の宮シンポジウム&社叢百景展』の説明があり開催に向け準備委員会を立ち上げ、三回の会合を持つまでになりました。詳しい経緯は会員の方には文書でお知らせいたします。

また7月頃には関東ブロック総会を開催する予定も発表され、橘三喜の墓前に赴く企画が披露されるなど興味深い内容の総会となりそうです。

郡順史先生より「一の宮巡拝旅行をしてほしい、一の宮の啓蒙をするべき。」とのお言葉をいただき、入江先生の御心を感じ取りました。
追悼の宴では先生のお写真を囲みながらのひと時となりました。おいしい料理にお酒もすすみ時の経つのも忘れ話に花が咲き終始にこやかな雰囲気のなか次の再会を約し散会いたしました。

今更ながら、先生の蒔かれた種の大きさと一の宮巡拝運動の尊さを感じております。関口代表は「使命感とでも言おうか入江先生から背中を押されている様な気がする。いつの間にかそうなっている。」と述べられ、入江先生に見守られているような心強く温かい気持ちの一周忌となりました。一の宮大神様の導きにより、参集された方々のさらなる発展とご多幸を心よりお祈り申し上げます。　　中瀬 光雄

一周忌法要を終えて‥‥献杯

梶　鮎太 プロフィール

1927年、広島県で生まれる。武蔵野美術大学油絵科卒業。
高校の美術教師を勤める傍ら、「瞼の母」など人情時代小説で知られる長谷川 伸、「徳川家康」の山岡荘八、美人画の岩田専太郎らの知遇を得て、新聞小説、雑誌などの挿絵の世界で画業に専念する。山岡作品のNHK大河ドラマ化に伴い、その背景画の評価をかわれ、日本テレビなど各社で活躍。小・中学校教科書、児童図書の挿絵なども多く、絵本の分野での作品も多い。息の長い画業は高く評価され、1998年には、長谷川 伸特別賞を受賞。

＊郡 順史先生のプロフィールは、次号にて紹介します。

小説「全國一の宮」調べ元祖

橘　三　喜（第二十五回）

郡　順史・作　　梶　鮎太・画

三喜が、天手長男命ならびに姫宮の旧跡を発見し、とりあえずの仮宮社を造ってから二十日ほどが経った。

しかし本藩からは何の通達もなかった。責任者である滝川國家老や村松寺社奉行からも、最初、発見に来て喜んでくれて「では直に殿のご意向を伺い如何にするか決定しよう」との言葉を残して藩へ戻って以来かんじんの動きをしめさない。

むろん一日も早い本祭事を欲している三喜としては、黙して待っていたわけではなかった。

与力の相川三郎と相談し、本藩の意向を伺いに相川に戻って貰った。だが、相川のもたらせた返辞は、要領を得ないものだった。

「主君は御用繁多ゆえ目下はお戻りになれないようである。さりながら一の宮の儀は決してお忘れなく、そのうち必ずお戻りあって、ご祭主をお勤めあそばされとの事である」

というもので、なぜ御用繁多なのか、そのうち必ず戻る（壱岐へ来島する）というが、そのうちとは何日ごろなのか、いずれもはっきりしない。

「お役に立たず申しわけございません」相川与力は両掌をついて詫びたが、詫びられても済む問題ではない。

三喜は、この上は自身が平戸へおもむいて、なお納得がゆかねば江戸へ行って、直接主君のご意向を伺おう、と考えた。

三喜にとって「一の宮」は至上の位置にあるものだった。殊に壱岐の一の宮天手長男命神社は、自分の故郷に在るもの、自分が再発見したもの、という以上に尊く大事なものと思っているのである。全國に一の宮は凡そ八十八個所有るといわれているが、壱岐の一の宮は、その始祖とさえ称されているのだ。

それが苦惨のすえ再発見されたのに拘ず長く放置、たとえ一刻でも祭事が行なわれないなど、三喜にとって許されぬことであった。

ここで少々余談にわたるやもしれぬが、では「一の宮」とはどういうものか、いつ、誰が、どのようにして祀ったのか、調べてみた。

が、まことの事は判明しなかった。もっとも有力な解説が記されていると思えるのは、当「全國一の宮巡拝会」の前会長の故・入江孝一郎氏の「一宮巡拝の旅」（みくに書房刊）で、こう解説されている。

『一の宮発生由来には諸説がある。古代の制度では國司が神拝と言って毎年、國内の神位の高い官社を巡拝するのが例であったので、後に主要な神社を選んで参拝するためにこの名称がつけられたと言われているが…』と。加えるに諸説が附せられているが、決定打はない。しかし信仰に決定打は必要ない、とも言えるかもしれない。そこに何百何千年という古い歴史と祖先からの代々の尊崇と信仰が有れば、それが決定打ではなかろうか。いずれ「一の宮」は後に稿をあらためて諸説を述べ、眞姿に近ずきたいと思う。

それはともあれ本藩平戸へ急行した三喜は、まず寺社奉行の村松伊織に面会を求めた。そして眞先きに、なぜ主君が、あれほどに壱岐一の宮社の再建をのぞまれておられたのにただちに、お帰りめさぬのか、その事情をただした。

しかし村松ははっきり答えなかった。身分柄の事情があって答えられなかったのかもしれない。

次に國家老滝川弥一右衛門を訪れた。

滝川もはじめは「ご用繁多でな」と、そのご用の内容を話さず言い訳の如く何度も繰りかえし、はては、「おぬしが神官を相勤めて祭りの事出来ぬか」と尋ねたりし、三喜が強く、「その様な軽薄なお言葉を口にされては困ります」と窘（たしな）めると、ためらいながらも「実は一」と重大な秘事をあかしたのである。

その一大事を聴き、三喜は即座に、江戸へ行き、主君に面会する決意をしたのだった。

（つづく）

『奈良一の宮シンポジウム&社叢百景展』準備委員会を開催

奈良一の宮シンポジウムは、平成16年シアトルの神流神社に於いて故入江孝一郎先生・バリッシュ・コウイチ宮司・現関口行弘代表世話人等がアメリカの将来について話し合われ「絵画によって一の宮を米国に知らせたい。」との関口現代表世話人の発案により一同の賛同を得て始まりました。

平成19年シアトルで開催予定の『一の宮絵画展』にさきがけ、奈良では一の宮に関係する各界のリーダーをお招きし、『奈良一の宮シンポジウム&社叢百景展』と銘打ってシンポジウムを併せて執り行うことになりました。

奈良一の宮シンポジウムポスター

昨年12月に奈良在住の氏家悦男氏を準備委員長に迎え準備委員会を設立し、これら計画を成功裏に導き、一の宮巡拝を内外に発信させようと準備を進めております。

日本文化の始まりを今に伝える一の宮を知る上で絶好な催しとなります。目で見る一の宮として絵画・写真・絵馬等を展示し、楽しんで頂けるよう企画いたしております。皆様のご参加を心よりお待ち申し上げております。

実行委員会から

実行委員会会長　氏家悦男

全国にある一の宮は、八百万の神々をおまつりする場として、ご神体山やおやしろの森を、そこに住む人々と共に千年を超えてお互い支えあって歩んできたと思われる。その一の宮と社叢をKeywordに『自他共生』をテーマにしたシンポジウムが古代史の舞台、古代遺跡の宝庫といわれる奈良で開催されることになり、奈良在住の私も実行委員会のメンバーに加えられた。シンポジウム開催の話を初めて耳にしたのは平成17年12月に第1回の実行委員会が奈良で開かれ、メンバーの役割分担が決まり、次は会場の確保が先決と言う事になったが、シンポジウムと展示を同じ場所で行える所は限られてくる。どのような会場で行うかでメンバーは喧々諤々の議論になった。結論がでないまま今後、毎月1回奈良で情報交換と打ち合わせを行うことを決め閉会した。1月の集まりでも議論百出、3月の集まりでやっと会場確保の目処が立った。この間メンバーの関口さんが東奔西走の大変な苦労をされた。しかし、会場使用のお墨付きがいただけたわけでもなく、私は今でも一抹の不安が残っている。会場確保と並行して、展示場のパネルの配置や参加者のネームプレート、演壇の水差しやコップの準備にいたるまで手落ちのないように目配り、気配り、手配りが9月の開催まで続くのだろう。

第1回実行委員会のメンバー

一の宮巡拝会

古代の聖地(いにしえ)・その息吹きと「氣」にふれる巡拝をして見ませんか

『100万人巡拝』をめざして…　賛同者歓迎・会員募集中

創房関宮(有)内
問い合せ事務局:☎072-791-5158

神々と出逢う ー神奈川の神道美術ー

ー神奈川県神社庁設立60周年記念ー
ー特別展開催中〈後期〉ー

相模国・武蔵国からなる神奈川県は山海の豊かな自然にめぐまれ、在地の神々に対する信仰も深く厚い。県下ゆかりの多くの神像・神宝・文化遺産の宝庫から約200点の遺宝が公開されて神々と出逢い悠久の歴史を感じることが出来ます。

平成18年4月1日(土)～5月7日(日)まで
於:神奈川県立歴史博物館

午前9時30分～午後5時(休館日:月曜日)

[みなとみらい線　馬車道駅　徒歩1分
JR　桜木町・関内駅から　徒歩8分]
http://ch.kanagawa-museum.jp/

年刊『一の宮巡拝』

創刊号5月5日発刊

B5判 132頁 無線とじ
定価 2,000円(税込)

第62回 伊勢神宮式年遷宮

～お木曳行事ご奉仕に参加～

平成18年5月5日(金)～5月6日(土)

5日 二見興玉神社　浜参宮
6日 奉曳～外宮～内宮御垣内参拝

◆お木曳行事 ご遷宮の御用材は木曽のお山から伐り出されて伊勢に運ばれます。木遣り音頭も勇ましく内宮・外宮まで1km奉曳することをお木曳行事といい、元来伊勢の旧領民だけがご奉仕する慣例でありましたが、昭和48年の第60回式年遷宮のお木曳から地元奉曳団のご理解により、全国の崇敬者も「1日神領民」として参加できることになりました。今回は外宮への陸曳行事に、紀伊国一の宮伊太祁曽神社の奥 宮司様のご厚意のもとオーストリアのフローリアン君と共に各世話人が参加させて頂くことが出来ました。